

プラス 0.24秒

まほろば丸

せっかちな盛夏の朝陽が早々と角度をつけてせり上がり、今日も爛々としたものを場内に照りつけはじめた。トラックの出発時刻が迫っているが、今朝は段取りよく仕分けが済んだので、こうして自販機の前で油を売る余裕がある。先日入ってきたばかりの若いのと一緒だ。ペットボトルのミネラル・ウォーターを口にふくみ、やめてしまった煙草のかわりにストレッチのような伸びを一つ。肩の張りが気になったのでさらにもう一つ――。

ほとんど無意識にそんな風に身体をほぐしていると、視界の隅に一羽の鳶が通りがかった。その食いつぱぐれがなさそうな鳶は、すっかり明るくなった卸売場棟の上空を悠々と舞っている。特にかわった風景ではないが、何となく目を細めてその様子を見上げたら、私は何か大切なことををぽっかりと忘れていた気がした。仕事やなんかの実務的なこととは別次元の、もっと毛色の違う何かをだ。それは、忘れていたというより、これから拵えていかなければならない種のものかも知れない。

ふと。ちょっとした遊び心がひねり出て、私は頭の中で長い長い風糸を鳶の腹に結んでグイッと引っぱってみた。すると、鳶は両翼をピンと張ったまま上へ下へと高度を変え、次に右へ左へと大きく大きく旋廻した。私は愉快的な心持になると共に、その距離の実測をしているような感覚になった。やがて、その風糸の距離に呼応するかのように周囲の景色が立体的に浮かび上がってきたので、私の目先にそびえ立ち、彼の眼下に鎮座する卸売場棟の広大さを久しぶりに再認識することが出来た。そして、この市場に初めて足を踏み入れたときの感慨が湧き上がる。この地方の食品流通の拠点であるこの巨大な建物には、中ほどに大型トラックが楽々とすれ違うことの出来る大きな通りが抜けているが、――これを境に青果市場と水産市場とにわかれている――夜明け前後の数時間、この大通りがあらゆる種類の車両をけたたましく呑み込みあるいは激しく吐き出す迫力に、私は完全に気圧されてしまったものだ。あれから四年が経つ。多少事情は違ってはきたが、この巨大な建物が雑多な荷と思惑とを吞吐し続けていることにはかわりはない。

「タカイさん」

「ん？」

私の名は酒井で新入りは聞き違えて覚えてしまったようだが、三時起きのこのバイトはじきに辞めていく者が多いのでこの手の訂正は日々しなくなっている。私も彼の名はうろ覚え。たしか二十歳すぎと云ったはずだから私より20歳ほど年下だ。

「ここの人達って、皆言葉遣いが乱暴ですね。まくし立てて云われるから聞き取れなくて……、日に日に萎縮してしまうなあ」

ここで働きはじめた頃の自分と彼とを重ねて苦笑い。私も随分戸惑ったものだ。

「食材を扱ってるいから多少ピリピリするのは仕方ないよ。荷出しがもたもたしていたらトラックが出せないからな。それに、これでも少しは柔らかくなったんだ。以前はもっ……」

—— 以前はもっと ——

私はなめらかに自分の口から出た、このお決まりの台詞をかき消すように言葉尻を濁した。嫌な使用感だった。

—— 昔はもっと ——

「……」

「それ、なにぶら下げてるんですか？」

「ん？」

お悩み相談はあっけなく立ち消えになり、次に彼は私が首元につけているものに興味を持った。

「これか？」

私は首から下げた革ひもをたぐり寄せて、その先端に結びつけてある物をTシャツの中から引っ張り出した。それは薬指を細く平たくしたくらいの大さきの板で、ボルトが入るように楕円の穴が等間隔に七つ開いている。金と銅を煮たような光沢。素材はチタン合金だと聞いている。

私の右足の腓骨ひこつに入っていたプレート……。

私は彼にどこからどう説明しようかと思案した結果。

「ちょっとした、お守りだよ」

と、要約しておいた。

会話に段落が着くと、ゆるりとした眠気が訪れて私はあくびを噛んだ。そして、目尻が湿ったのを機に再び上空の鳶に目をやると、先ほどとほぼ同じ位置で静止画像のように小さく留まっていた。ただし、鳶だと思い込んでいた彼の羽がいやに白く感じられた。尾羽も丸い。

「鷹？ ノスリか……？」

軽やかな興奮と睡魔とが溶け合い、瞼の裾に積もった市場の塵に目をしかめていると、彼は唐突に身を畳み、私めがけて急降下をはじめたように見えた。一瞬だった。彼は一気に間合いを詰めたかと思うと、私の頭上で翼を完璧に広げて急停止し、鋭利な爪のついた脚でそこにある何かを掴み、見事に身体を翻して飛び去った。目には映らなかったが、彼は確かに何かを掴んでいた。彼はろくに羽ばたきもせず上昇を続けた。小さくなっていく彼のノスリ班を追いながら、私は彼が持ち去ったものに想いを巡らせた——。

*

父の節くれ立った手は、まだ私の顔の近くにあった。

子供の頃。海から一番遠い街で生まれ育った私は、「幼い頃は潮の満ち引きを肌で知っていた」と云う父がうらやましくて仕方がなかった。それに父は昭和一桁の生まれで絨毯爆撃がどういうものか身をもって知っていたし、そんな物騒で不便な時代を嘆きつつも生きのびたことを懐かしむ父がうらやましかった。そして、何より父はテスターの使い方を知っていた。傷だらけで油にまみれた黒い装置。それにはたくさんの穴があいていて、父は毎回違う穴に赤と黒のジャックを差し込んだ。時折、髪の毛のような針が大きく振れる。その都度、私はソケットの豆球が点灯

する時のように気持ちがピタッとほころんだ。

私はそんな父の手をいつも走って追いかけていた。

「俺のようになるなよ」と父は私によく云った。「お父さんのようにならないで」という風なことを母も云った。大人はよく、わざと本心と違う事を云っては大声で笑う。だからこのようなやりとりも、両親の軽い言葉遊びの一つだと思っていたのだが、時が流れるにつれそれらの言葉は私の細胞に染み入ることとなる。

私はついどこに向かって走って良いのやらわからなくなったが、だからといって、立ち止まる勇気もなかった。いや、「立ち止まってはいけない」と誰かにせつつかれていた気もする。

海はうんと遠い。

父は何度か海水浴に連れて行ってくれた。父の血は明治、大正の流れをくんでいたもので、ちょっとした旅行にもまるで神事を取り仕切るような決意と準備とが必要だ。着替えの予備はふんだんに用意し、ビニール袋で小分け。鞆の端には折りたたみの傘が3本。

朝は早い。3時、遅くとも4時には起床。お神酒を杯するように、恭しくコーヒーを空けてからようやく出発だ。

海は遠い。

髪の毛を炙って縮れさせたような旧道を延々と走っていく。父は節くれ立った手でチェンジレバーを何度も何度も低速に入れた。10年落ちのその緑の車は確かラジエターがいかれてはいたが、整備工の経験がある父にとっては、大した問題ではない。それよりも、どこそこを何時に通過したいという思惑に神経をとがらせていて、そのために父は忙しくシフトチェンジする。そして私は盛んに「あとどのくらいで着くのか？」について質問した。

砂浜に立った。

海と空――。普段これほど多量の同色を一度に見ることがないので少しひるむ。昨夜から握りしめている水中メガネをかぶると、視界が狭まってわずかに勇気がわいたが、せっかくの磯の香りがゴムのそれにとって代わる。海をよく知る父がずかずかと波打ち際へと向かうので私も半歩下がってつき従った。

海水浴客に釣りをさせる、いかにもうさん臭そうな小屋で、我々は大きな鯉を釣り上げた。「連れて帰る」と私は父に散々訴えたが、「途中で弱ってしまうから、ここで飼ってもらおうぞ」父は勝手にそう決めて、宿泊していた民宿の庭池に手際よく私の鯉を入れてしまった。そして、「また来年も会えるよ」と優しく私の頭をなでた。私の鯉は元からいる鯉たちとさっさと合流し嬉しげに泳ぎはじめたが、私はそのことが気に入らなかった。鯉は白地に赤の斑があって、他の鯉とは比べ物にならないほど立派だ。私の鯉と張り合えるとしたらあの全身が金の奴だけだろう。私は池に落ちこまないよう父に身体を支えてもらいながら、勇ましく回遊する鯉をいつまでも見ている。

「貝殻は波の音を記憶している」

そう教えてもらったので、拾った貝を耳にあてがいながら、いつまでも浜辺を歩く。そうして

いることに飽きてきて、貝殻を放ると父の手がどこにもなかった。

父とはぐれた。

と同時に寄せては返す波の音が二段階ほど大きくなり、浜で遊ぶ人々の金切り声がつんざく。かわった身なりの白い鳥が私を見て鼻で笑うと、生乾きの海水パンツが急に冷たくなった。周りを見わたすと砂浜は両側にどこまでも続き、それらの先は遠すぎてぼやけていた。父といた場所に建っていたセピア色の小屋が重要な手がかりだが、それと全く同じ建物が浜に沿って、軍人のように整列していることがわかった。自分が無数のギアチェンジを経てここに着いたことと、このところ父と母が喧嘩ばかりしていることとを一気に思い出す。束の間私は、はぐれた場所を丁寧に理詰めで探したがじきに耐えきれなくなり、闇雲に泣きながら走り出した。

私はその後もよく迷子になり、父の手を探してばかりいた。

表にこそ出さないが40歳を過ぎた今でも何らかわらない。いつも何かに迷い、不安にさいなまれている。そういうものを隠したり目立たなくする術を覚えただけである。父は12年前に逝ったが、あの夏すではぐれていたもので、案の定、思ったより涙は出なかった。そういえば私はあの浜で走り出してから、彷徨いながらずっと小走^{こばし}ってきた。

*

真夏にも関わらず細身の私には青果市場の朝は肌寒かった。慣れない現場での仕事。あることがきっかけで一大決心し、この中卸業者の仕分けのアルバイトをはじめたが、こうして一ヶ月が過ぎても中々場内の空気に馴染めずにいた。そして童顔で上背のある私はそういうもたつきを周囲に隠せなかった。私は焦っていた。難しいことを課せられているわけではない。数を数えて積む。そういうこと。むしろ簡単な作業。しかし、罵声と張った空気の中でいくつかの軽いルール——ケースが荷崩れしないよう、廻しながら組んで積み上げるなど——すら私は覚えるのに暇がかかった。そもそも、叱咤され動きながら覚えるということに私は慣れていなかった。要するに甘かった。

「はやくしろ！」

薄暗い所で云われるがままに働いていたはずだが、いつの間にか夜が明けて少し陽に角度がついている。私は焦っていた——。

「行くぞ！」

集荷場に戻るため上司が運転するフォークリフトに同乗した。トラックの出る時間が迫り、卸売場棟が本格的にあらゆる車両を吞吐している。誰も彼もパレットに荷を積む速度があがっている。バインダーを持った男が何かを指差して怒鳴っている。荷台から落としたケースを拾い集めている者。出たら目にバックしてくるトラックに、クラクションを殴るように鳴らして苛立ちをあらわにする男。目を吊り上げて不機嫌そうに何かを投げつけるキャップをかぶった男——。

あちらこちらで罵声が飛び交い、オイルとひしゃげた段ボールの匂いがたちこめる場内は、まるで喧嘩祭りのクライマックスのような高揚感だ。そんなことに気を取られていると、上司が急

にフォークリフトを減速させ左折して止めようとした。私は少し思うところがあって、フォークリフトが止まらないうちに右側にトンと飛び降りた。父と過ごした時間。そして、父からはぐれてしまったからの時間。それらはずっとゆるやかだった。しかし、私の作業靴がトンとアスファルトに接地し、その感触を味わったゼロコンマ何秒後から事態は急変した。私は何度も、何度もアスファルトの上を転がりまわった。痛みでそうしたのか、そうすることによって時間をさかのぼろうとしたのか……。いまさらそれを知る術はない。時間が、ダッダッダッ、と濁音を響かせて過ぎた。

私はいま降りたばかりのフォークリフトに足を――。



パイプ椅子に座ってテレビのニュースを見ていた妻が、ベッドの上で急に身震いした私をおもんばかって、「大丈夫？」という目を私に向けた。今朝から何かの拍子にまどろんでは、繰り返し同じ夢ばかり見る。

事故から二日が経過した。私はあのフォークリフトの事故で、市場から数分の所にある総合病院に救急車で搬送された。レントゲン検査の結果は右足首の複雑骨折。足首外側の腓骨^{ひこつ}の先と内側のくるぶしが折れていた。不幸中の幸いとでも云おうか、事故の規模にしては医者が感心するほど外傷が少なく、緊急手術を受ける必要はなかった。それで後々のことを考えてすぐに自宅に近い病院に移り、その翌日の午後――。つまり昨日の午後、骨折しているヶ所にプレートとボルトを入れる手術を受けた。

「嫌な夢ばかり見る……」

「あんな後だもの、仕方ないわよ」

妻はそう云ってリモコンを課金式のテレビに向けて操作し、チャンネルを昼のバラエティー番組に変えた。馴染みのタレントが勤勉に大騒ぎしている。私は子供がアリの行列でも眺めるかのようにその様子をぼんやりと追った。

「この人、最近一段ときれいになったわねえ。スタイルも抜群だし、私もこんなふうに生まれなかったなあ」

妻が云った。不思議なものでこの妻の口癖を聞いたとたんに、間借りの空間が一瞬そうでなくなる。妻は私より二つ年下。優しい小顔で歳相応分相応、どちらかいうときれいな容姿をしていると思うが、本人はあまり満足していないようだ。そんな妻の横顔を見ながら、ややぞんざいに体勢をかえると、麻酔が切れてジンジンしている右足がさらにうずいた。顔がゆがむ。市場でもそうだったが、ここでも無駄に伸びた上背がうとましい。

「痛む？」

「ああ。でも、今日の明け方のことを思ったら何でもないよ」

私は気晴らしに、昨夜足の麻酔がきれていった様子を再び妻に話しはじめた。すでに三度は同じことを話したような気がする。妻とは入院中の所用等、色々と打ち合わせなければならないのだが、今はとてもそんな気分じゃない。とりあえず直近の右足の痛み^{痛み}に心をもたれさせておき

たかった。どのみち一人きりになれば、否応なく事故にいたった経緯や、今後の不安材料にしくしくと思いを沈めるのだから。

「娘達は遅いな」

「もう戻るでしょう」

売店で飲み物を買ってくると云って出かけた、中2と小6の娘たちのことが少し気になった。ほかにも同室の入院患者さんたちの様子や廊下の様子、うだるような空が映る右側の窓の様子……。等々、気ままに意識を向けて、全くどうでもいいことばかりを口に出した。

「明日は雨になるのか？」

「さあ。どうかしら」

ふと、妻とつきあいはじめた頃、映画の上映時間を喫茶店で延々と待った日のことを思い出す。

しばらくすると食事の片づけがはじまって、部屋と廊下があわただしくなった。昼食は鮭の塩焼きと煮物に酢和え、ご飯に味噌汁といった案配。プラスチックの皿で食べなければならないが予想に反して旨かった。内臓には問題がないので食事は普通に摂っている。

「取りに来てくれるから、置いとけばいいよ」

食べ終わった食器はどうするのだろうか、ちょっと気にもみ周囲を見わたしていると、右隣のベッドの青木さんが声をかけてくれた。声が大きい。妻が、「声の大きい人に悪い人はいないのよ」と笑って耳打ちした。青木さんは50代。大柄で角刈り。かなり強面だが、細かいことによく気がついて、入院当初から何かと面倒をみてもらっている。右手の人指し指に包帯をしているが、青木さんはじき退院するそうだ。「おとなりさんが退院したらベッドを代わらせてもらおう？」と妻が一度云ったが、青木さんのベッドは窓際でとても明るい。

左隣は河西さん。端正な顔立ちで、見るからに几帳面そうな30代。きゃしゃな身体にしっかりと固定された左腕が何とも痛々しい。無口で、いつもイヤホンをしてスマート・フォンを触っている。

この病室は南館の三階にある6人部屋で、我々三人は部屋に入って右側の壁に枕を向けて寝ている。つまり、河西さん、私、青木さんの順。入って左側のベッドは手前の2つが空いていて、奥の窓際には堀井さんという白髪の上品そうな初老の男性。この方は寝てばかりいて、他の3人とは滅多に言葉をかわすことがない。どこにも包帯はしていないし、普通に立って歩いておられるので、どこの具合が悪いのかまるで見当がつかない。ま、そのうちわかるのだろう。当分はここで過ごすのだから……。

娘らが売店から戻ってきた。そして、帰っていった。

陽はまだ高い。

*

父と母はしょっちゅう喧嘩していた。父は憤り、母はすすり泣いていた。そんな様子を見るのは悲しかったが、何事もなかったかのように、翌日二人が笑いあっている姿を見るのはもっと悲

しかった。そんな時、私は決まって下腹が痛くなった。

息を切らして走っても下腹が痛くなった。しかし、やせ我慢をしてそのまま走っていると、しだいに治まってくることを私は知っていた。

だから無理して走った。

私はいつも何かに憤っていて、それを燃料にして走っていた。そしてクタクタになるまで走っておいて、膝に手をつけて肩で息をした。これがワンサイクル。私という人間は走っているか疲れきっているかで、何かをじっくり考えることは苦手だった。幸い、どういうわけか息を整えながら走ってさえいれば、皆たいていの事は大目にみてくれた。褒めてもらうこともしばしば――。

私はそういった自身の特性や位置エネルギーを利用し、帆を隆々と膨らませて担ぎ出されるように社会に出た。少なくとも自身はそういう風に理解していた。しかし、残念ながら幾つかの誤算と思い違いがあり、私はいきなり難しい選択を迫られる状況に陥ってしまった。当然。私には何らそれに対する心積もりも備えもなかった。

いくつかの空虚な抵抗を試みた後、私は妙なテンションで夜通し呑み歩いた者が朝帰りでもするかのよう故郷に帰った。そして二日酔いを治そうとする者のように、せっかく身体に入れたものを吐き出しながら二十代を過ごし、ベアリングが割れたスーパーのショッピングカートのようにギクシャクと三十代を過ごした。

もちろん。そういうことが出来る場所や受け皿があったことは幸運だったし、ずっと下を向いて暮らしてきたわけではない。似たような境遇の女性と縁があって結婚し、子供も授かった――。

四十歳を過ぎ二人の娘もずいぶん大きくなったが、私はある出来事あって仕事への取り組みを根っこから改めることとした。つまり、少々生き方をかえようとした。不安もあったが遅蒔きながら新しい目標が出来、その準備として私は事務機を扱う実家の家業とは別に、青果市場でアルバイトをすることに決めた。こうすることがこのチャンスに報える唯一の方法だと思えた。これは、けして若い頃の失敗を取り戻すといった類のものではなく、もう少し静かな取り組みだった。

「ぼやぼやするな！」

主にデスクワークを経て営業職を継いだ私は、この歳までほとんど現場に出て働いたことがなかった。仕事中のテンション、言葉遣い、着想……。かなりの覚悟があったはずだが、いざ市場に入ってみると丸腰で戦場に放り出されたような気持ちになり、早朝とも深夜ともいえる時間に起きて家を出て行くことも、そうした陰々たる気分には拍車をかけた。

細身で元々寒がりだが、真夏だというのに現場の夜明け前は心身を凍えさせた。

「宮崎の胡瓜M、5ケース。すぐにここに持って来いや！」

胡瓜、茄子、トマト……。慣れ親しんだこれらの名前も、産地やサイズなどの規格や符号を付けて早口で交わされると、私には全く聞き取れなかった。聞き返すと怒鳴られた。

「走れ！」

私はもはや速くは走れなかった。私は焦って腕時計ばかり見ていた。

私は焦っていた。

気づいたら、私は上司が運転するフォークリフトに同乗していた――。

慣れない現場での仕事――。まるで喧嘩祭りのクライマックスのような高揚感――。上司が急にフォークリフトを減速させ――。私は少し思うところがあって、フォークリフトが止まらないうちに右側に――。

トン……。



「大丈夫か？」

身震いして起きた私に気づいて、青木さんが声をかけてくれた。大きな声だ。なんとか笑みをつくって返す。

「俺もこれをやった翌日は嫌な夢ばかり見たよ」

青木さんは包帯を巻いた人差し指を私に見せて、カツカと大きく笑った。

「倒れてきた資材に思わず手を出してしまっただけ……」

正直、自分のトラウマにさいなまれている時に、他人のアクシデントなんかに興味はないが、黙って聞く。52歳。大手製造会社勤務。右手人差し指骨折。

「向こうの河西君はね……」

自身の話が済むと、今度は左側の河西さんの事情。30歳。アパレル関係。通勤中、交通事故に巻きこまれたそうだ。左肩骨折。

「それで、酒井さんはどうしたの？」

青木さんは名刺をわたすように、自分たちの状況を話し終わると、少しトーンを変えて慎重にこう聞いてきた。すでに丸二日ベッドを並べているが、足のことに触れてきたのはこれが初めて。自分が考えている以上に憔悴しきっていたのかもしれない。

「フォークリフトに足を踏まれましてね……」

私は嫌でも思い返してしまうあのシーンに、こちらから出向いて行って検証し、青木さんに話した。

フォークリフトは、ハンドルをまわすと後輪が動いて方向をかえる仕組みになっている。あの時、私は運転席の右側に便乗させてもらっていたのだが、運転していた上司が私の思惑と違う場所で左折し、フォークリフトを止めようとしたので、私は反射的に飛び降りてしまった。もちろん、私は十分に距離をとったつもりだったが、後輪はその独特の軌道でまわり込んできて、ちょうど私の右足を目指して追いかけてくる形となったのだ。一瞬だった。後輪が私の足首に乗ったあと、車体が跳ね上がった感触が、右足に生々しく残っている。

「フォークリフトの動きを理解していなかったんですよね……」

私はため息まじりにこう云って話を切り上げた。

青木さんから視線を移して反対側のベッドを見ると、堀井さんが胸の上できちんと手を組んで

寝ておられた。

—この方の身には一体何があったのだろう？—

そんなことを少しだけ考えてみる

手術で打った脊髄への半身麻酔が昨夜遅くに切れ、その後は坩堝に足を突っ込んでいるような案配だったので朝まで一睡も出来なかった。朝方、痛みを突きつける方が根負けしたのか、痛みを感じる機能が壊れてしまったかして、坩堝が火鉢ほどの火力になり、昼ごろになってようやく、じっとしている分にはそれほど痛まなくなった。午後からはゆるりとした圧迫の中でまどろんでばかりいる。

「大丈夫。すぐ元のように歩けるようになりますよ」

夕方。担当医が様子を見に来てこう云ってくれた。昨日の手術はうまくいき術後の推移も良好なので、2～3ヶ月ほどで普通に暮らせるようになるだろうということだった。足首には2カ所にチタン製のプレートとボルトが入っていて、骨がつくと今度はそれらを取り出す手術を受けなければならないようだ。そんな楽観的なスケジュールを聴いてひとまず安堵したのか、ようやく自分の足をしげしげと眺める気になった。太ももの付け根からつま先が三倍に腫れ上がり数倍に黒ずんでいた。本当に^い鑄こした炭火の中に放り込んでいたような趣きである。

担当医に走れるようになるのかも聞きたかったが止めておく。



「……、あの日の青木先輩と高橋さんとの勝負は見ごたえありましたねえ」

「あいつの学校は進学校だった。意地でも勝ちたかったんだ」

何度目かに目覚めたとき、青木さんに見舞い客が来ていて何やら昔話に興じていた。二人とも声が大きい。

「先輩は闘志を思いきり表に出すタイプ。高橋さんは静かに闘志を燃やすタイプ。好対照で見えて可笑しかったです」

「結局、直接勝負したのはあの日の2回だけだったな。決勝はかろうじて勝ったが、準決では俺が負けたんだ」

はじめは少しうるさく感じた二人の会話だったが私はしだいに引き寄せられて、まどろみと鈍痛の隙間から這い出してきた。

「え、そうだったんですか？」

「あの準決で奴は11秒フラット。俺は11秒1だった」

私はハッとした。二人が何かのスポーツについて話しているのには違いないが、いま青木さんの口から飛び出したタイムは――。

「青木さん」

右側の青木さんたちの会話に本格的に聞き耳を立て始めた矢先、反対側から思わぬ声があが

った。

「それって100mの話をしてるんですか？」

無口な河西君が、定規で測ったような口調で青木さんにそう尋ねた。

「おお、そうだ。若い頃、陸上やっててな。これでも結構速かったんだ」

青木さんが嬉しげに即答した。

「へえー、青木さんの時代で11秒前半が出たら、かなりなレベルですね。いつの記録ですか？」

「インターハイの地方予選だ。準決と決勝、両方とも11秒1だった」

「風は？」

「んー。何メートルだったかな？ かなり強い向い風だったのは確かだな」

「おっ！ それは立派な記録ですね。その頃の高校生ならトップレベルの記録でしょう？本大会はどうだったんです？ 国体は？」

「それがなあ——」

河西君は饒舌な側面を發揮して、私の聞きたいことをリズム良く引き出してくれた。青木さんは中学から陸上を始めて、高2の終わり頃から一気に力をつけ、3年になるとインターハイの県予選、地方予選、と順調に制した。しかしその後は故障に泣き、本戦そして国体は棒に振ったらしい。

「高校から今の会社に入れてもらって、実業団でも少し走ったんだが、パツとせず……。その時の11秒1が結局俺のベスト記録になってしまったんだ」

高校の戦歴を話すうちは爛々と目を輝かせていた青木さんだったが、故障、そして実業団の話になると途端に舌が重くなり、河西君から外した視線が私のベッドの上あたりを彷徨っている。河西君も驚いた巻貝が殻に戻るように、再びスマートフォンに視線を落としていつもの彼に戻った。

病室に沈んだ空気が流れて、私は少し切ない気分になった。



「それじゃ先輩、失礼します！」

「お疲れ！」

やがて、青木さんの後輩が体育会系の礼を尽くして病室を出て行くと、かわりに、いささかせつちかのような看護婦さんが入って来た。そして、その看護婦さんがセットしてくれた点滴のペースも彼女の印象同様にいささか速すぎたので、管に付いているつまみを自分で調整した——。堀井さんが白髪を整えて無言でどこかに出かけた——。そうこうしているうちに先ほど病室にくぐもった空気がエアコンのダストに消えた。

「いいサイトがありましたよ」

河西君が唐突にこう云うと、ベッドから降り青木さんの所に移動した。印象より人懐っこいのかもしれない。先ほどまで後輩が座っていたパイプ椅子に腰かけ、スマートフォンをみせている

。

「インターハイの歴代優勝記録の一覧です」

「お！ 携帯でこんなのが見れるのか？ 凄いな。携帯ばかりいじくってるモヤシっ子が増えるはずだよな」

青木さんが記録簿より携帯の機能に感心しながら画面を覗き込んだ。私も加わりたいがどうしようもない……。青木さんがモヤシっ子と云ったのは、河西君のことをからかったのかもしれない。痩せぎすというほどでもないが多少そういった感がある。

「この一覧表、なぜか開催年が書かれてないんですよ。青木さんは52歳っておっしゃいましたよね？」

河西君がそう云って、少し面倒だという顔をした。

「ん。来月で52になる」

「僕が高3の時は、えー。この子が10秒50で優勝したから——、我々は48回大会。えー。52引くことの30は22だから、あー。青木さんの時は26回大会ですね。おっ、向い風0.9の10秒8かあ。結構速いですね。でも、ほら翌年の大会は11秒1が優勝タイムですよ。青木さん順調にいったら普通に決勝に残れたでしょうね」

「！」

「ほう、なるほどな……。しかし、河西君は暗算早いな」

河西君が気になることを色々つぶやいたので私は落ち着かない気分になったが、青木さんの方はどうもピント外れな感心をしてカッカと笑った。私は思わず半身を起こして、かわりにこう聞いた。

「河西君も100mを？」

「ええ、中学と高校の6年間。インターハイはこの優勝した奴と予選で一緒に走りました。そのときの記録が僕のベストです。彼に引っぱってもらったのかな？ 10秒75。追い風0.7mです」

河西君は随分薄暗くなった窓を背に、定規で測ったような口調でこう答えた。

足が痛痒くなった。



事故からこっち、私はほとんどまともに寝ていない。もっとも暇さえあればまどろんでいる。右足の痛みから逃げるようにしてぬかるんだように眠り、あのシーンの後悔から逃げるようにして跳ね起きる……。というようなことを繰り返している。他に逃げ場がないので仕方がない。ただ、食事、検温、点滴、消毒——。ベッドではこなすべきことがそれなりにあって、入院生活も私が想像していたよりは中々忙しい。そして、やはり命を扱う現場らしく運命的な出会いが少なからずあり、過去を揺さぶられ霞がかった未来を隆起させられている。私は彼らの過去にリンクしてからは悪夢を見る頻度が減り、かわりに——記憶の奥まった所で見つけた——埃のかぶった柳行李のようなフォルダから、モノクロの懐かしい単語を引っ張り出しはじめた。そして、ゆっくりとあの日に帰っていった。

*

高1の夏。

アンツーカー。ヤッケ。アップシューズ。エンドレスリレー……。

この年回り、県内にはコンスタントに10秒台で走れる人はいなかったが、私の先輩が冬場に自力をつけてその域に入った。上空に青い風がそよぎ、トラックに鳴り響くホイッスルの残音が、風の色に染まっていく――。

県大会の決勝。私は先輩に呼ばれて、その眩しいばかりのユニフォームに、別ゼッケンをつけるように命じられた。試合では選手は各自、通しのゼッケンをつけているが、決勝のレースのみコース・ナンバーのゼッケンを上からつけて走る。

先輩は胸の別ゼッケンを自分でつけながら静かに集中を高めていた。私は慌てて駆け寄り、手渡された安全ピンで背中にゼッケンをつけはじめたが、すぐに一人でここに来たことを悔いた。スタート地点に一歩足を踏み入れると、外からでは伺い知れない独特の緊張感に満ちていたからだ。安全ピンを持つ私の手が震える。背中にピンを刺さないように神経をとがらせながら、何とかゼッケンをつけ終わると、左側がわずかに引きつっているように感じた。が、次の瞬間にスターターがホイッスルを高らかに吹いた。

「せ、先輩。ファイトです」

「サンキュー」

先輩は振り返らずに私に礼を云い、スターティング・ブロックに向かって悠々と歩いて行った――。

高2の夏。

ホッピング。タータン。ゲーターレード。ウォークマンⅡ……。

競技場の改修工事が竣工した。心待ちにしていた県内初の全天候型トラック。

母に無理を云って買ってもらった、専用のスパイクをおろす日が来た。パステルカラーのアシックス。山吹色をした付属の巾着からそいつを取り出すと、文具のような香りがした――。

鈍い痛みに気づいたのは、第2走者で出場したマイル・リレーを走り終え、例の「ケツワレ」がおさまった時だった。水ぶくれ。はじめは靴ずれかと思ったがどうも様子が違う。

「火傷だ」

と誰かが云った。そういえば6ヶ所きれいに並んでいる。この日は炎天下で、どうやらスパイクのピンに熱を持ったのが原因に違いなかった。ソールに欠陥があるようだが、原因がわかるとホッと、福笑いのような足の裏を仲間と見せ合って笑い飛ばした。

もうすぐ決勝だ――。

高3の夏。

バウンディング。インターバル。もも上げ。サブ・グランド……。

毎日が気だるい冬季の計画的な追い込みから、徐々にスピード練習に切り替えていく時点で、私はこのシーズン中に10秒台で走れることに確信を持っていた。足の指がそれぞれ一回り太くなったので、春先にスパイクをワンサイズ大きなものに買い換えてもらった。白地に赤のアシックスのライン。自宅に持ち帰ってから標準のピンをスクリュタイプ
のピンに交換すると、6帖の部屋がどうにかなくなってしまふほどのアドレナリンが出て困った。

県大会決勝。予選も準決も後半はきちんと流して十分な余力を残している。別ゼッケンをつけてくれるように後輩に頼んで、自分で胸のゼッケンをつけた。安全ピンを扱う手は震えない。「背中を突くなよ」と、後輩をからかう余裕もある。

ゼッケンをつけ終え、ゆっくりとスタート・ラインに向かう。スパイクの丈と手の幅を使って測り、スターティング・ブロックを自分の好みにセットし直した。ふと、鋭角にブロックを据えていた先輩の姿がよぎり、いつもより一段角度をつけようかと思ったが止す。

「ピッ、ピーー」

決勝審判のホイッスルが鳴り響いた。競技場の雑多なノイズが消え、視界が狭くなる。心臓がせり出しそうだ。

「はい。それでは始めます」

スターターが紋切り型の台詞を感情を抑えて放つ。

「位置について」

顔と腿を何度か叩いてブロックについた。中々座らない者。さっさとセットし身体を小刻みに揺らす者。何度も大きく息を吐き出す者。よくわからない氣勢をあげる者……。わずかな自由な時間に8人8様の儀式が行われる。やがて、ぴたりと時間が止まった。スタンドが静まり、何人かの咳払いがこだまする。ストップウォッチに指をかけた計時審判員が、瞬きをしないように注意しながら唾を呑む。

「よーい……」

ラインに沿わせて立てた10本の指に体重のほとんどが載ると、タータン・トラックの粒がわずかに沈んだ――。



「大丈夫か？」

身震いして起きた私に気づいて、青木さんが声をかけてくれた。大きな声だ。

「今のは……、懐かしい夢でした」

私は笑顔で応えた。もうすぐ就寝の時間だが今夜は長くなりそうだ。

*

私は中学2年生から陸上をはじめ、高校の3年間、そして青木さんと同じく実業団で少し――

。約7年間、陸上競技に接した。100mのベストはあの県大会で出した10秒9。十分な伸び代があると感じつつ実業団へと進んだので、この結果には寂しい想いがあり、だから青木さんとは共感できる部分が多い。ただし、結果的にはこれといった記録を残せなかった私だが、高校時代は混成競技が得意だったので、大会期間中はトラックの内外を頻繁に行き来し、いくつかの競技場に忘れ得ぬ記憶を刻んである。

3度目の試技でバーを越えた時のマットの柔らかな感触。ハードルを膝に当てた時の嫌な音。砲丸とロージンバックの匂いが混ざった赤錆びた匂い。最終コールでゼッケンを読み上げる拡声器。気温が上がるほどにヒンヤリとする、スタンド裏の階段。テントの屋根にたまる雨水。ヤツケの裏にたまる汗。その世界にしか通用しない合言葉。

「行きます！」 「ファイト！」 「ちわっす！」

芝生に寝転んで足をストレッチし、そのまま空を見上げたら、油蟬の音がピットにこだましていた――。

私は幼少の頃から身体を動かすことを好み、裏山で息を切らしながら成長した。そして競技を通して自分で考えることもかろうじて学んでいき、自分の将来にも少し目を向け始めた。しかし、皮肉なことに走り疲れていることを理由にそのことから目をそらせてばかりいた。

「実業団で働きながら走ったらどうだ」

進路を決めかねていたときに陸上部の顧問がこう声をかけてくれた。この時点まで陸上は高校まででやめると決めていたのだが、この一言で燃やしきれない部分がかすぶりはじめた。やがて身体のピークを迎えることを理解していたし、技術面で多くの課題を残していることも把握していた。だから、悪く転んだとしても最低限の結果は出せる自信があった――。

しかし。新天地ではその結果を出すまでもなく、私は十人十色の「引退後」を知ってしまった。競技生活を終えた方々の様々な実像や残像を目の当たりにしたのである――。華々しい記録を残した人のその後。可もなく不可もなく、静かに競技を終えた人のその後。やむを得ず、そして断腸の思いで去っていった人のその後……。諸先輩の眉間にあるものは、けして私に希望を与えてはくれなかった。トレーニング理論など、スポーツにおける思想も大きな変遷期を迎えていたが、そういった流れも組織の扉を越えては来ておらず、そもそも組織の中で一社員であり1選手であるという位置づけが曖昧で定まっていなかった。

入社して2年も経たないうちに、私はそういったメンタル面の問題に直面し、並行して足の故障にも悩みはじめる。しかし、幸か不幸かそれらの問題がこじれるより先に、所属していた陸上部が実にあっけなく廃部となった。母体企業の業績悪化による方針転換――。と、同時に私は関連会社への出向を命ぜられ、それまでのやりがいのある仕事から一転、単調で厳しい流れ作業に従事することとなった。

それからしばらくして、私は親戚に年賀状でも出すように退職届けを書いた。どのような文面にしたのである？ 全く記憶にない。ただ、どんな用紙に書けば良いのかを迷った覚えはある。

「今朝はだいぶ良さそうね」

病院の意外に忙しい朝が一段落すると、妻が来てくれ挨拶がわりにこう云った。

「昨夜はけっこう眠れたよ。寝返りをうつたびに、痛くて起きてしまうけどな」

私は身を起こしながらそう答えた。妻はさげてきたバックを丸椅子の上に置き、頼んでおいた細々とした身の回り品を取り出しはじめたが、じきにその動きを止めた。

「そうそう、これを先にわたさなきゃね」

妻がバックのポケットから取り出したのは、可愛いキャラクター柄の封筒。2通ある。私はそれらを丁寧に受け取ったが、すぐに開封するのが惜しくて一旦、枕元に置いた。

「子供たち遅れずに学校行ったか？」

「何とかね。月曜日はいつものようにぎりぎりよ」

妻がこう云って笑うと、今日が週明けであることを再認識し、どうりで昨日は見舞い客が多かったはずだと合点した。事故後始めて曜日について考えた気がする。

娘たちは幼い頃から事あるごとに、こうして手紙を書いてくれるので、自室には専用の入れ物がある。ちらりと貯まり具合を思い浮かべてから、わずかに落ち着いた色目の方から順に開ける。上が中学に入ってから、どちらが姉のものかがわかりやすくなってきた。

手紙には、「はやく退院して欲しい」ということをいつもの調子で書いてくれていた。特別なことは記されていないが、これがいい。下の娘の方には、いつものように飼っている犬の絵が書かれていて、吹き出しを使ってしゃべらせている。

帰りたくなった。

「テニスの方はどんな感じだ？」

「いまのところは、とりあえず続ける気であるみたいよ」

「そうか……」

上の娘は中学に入ってテニス部に入ったのだが、このところ顧問や先輩としっくりいってない様子で、私はこのことが気になって仕方ない。

「いつの時代も似たようなものだな。だから、運動部には入るなど云ってあったのに」

私はため息混じりにこう云うと、妻が意味深に笑った。

「あなたの子だから仕方がないわね」

「いい文化部か何かにかわれないのかな？」

「あの子、本当のところは陸上部に入りたいかったのよ」

「ん？……」

妻はテレビが置かれているワゴンの周りをてきぱきと片付けながら、我々にとってわりと重要なことをさらりと云った。私は急に足がつって困ったような気分になって、

「喉が乾いた」

と、わがまを云った。

＊

なにかに夢中になると疲れ果てるまでそのことに没頭してしまい、他のことが極端におろそかになってしまう……。私の周囲の大人は、そういう私のバランスの悪さがある時期まで指摘してくれた。しかし、私がこの特性を活かして「走る」という特技をある程度のレベルまで引き上げると、彼らは手の平を返したように猫なで声になった。はじめはぞっとしたが、そのうちに慣れてまんざらでもなくなった。

「いつか走らなくなるか、走れなくなるから、その時のことも考えとけよ」

中にはこんなことを云ってくれる人もいたし、私も薄々気づいていたが、このことを中々直視できなかった。そして、実にあっけなく私は走れなくなって。走らなくなった。やがて私は自分の「特性」を活かして仕事に打ち込んだ。走ったのと同じ手法で仕事をすれば、おのずと結果がついてくると思っていたのだ。しかし、そこに立っていたのは単なるバランスの悪い男だった。

◇

なにかに夢中になると疲れ果てるまでそのことに没頭してしまい、他のことが極端におろそかになってしまう……。私はそうした自分のバランスの悪さがある時期から持て余し、苦々しく思っていた。だから、この悪習を娘たちが引き継がないように精一杯注意しながら彼女らの成長に口を挟んだ。特に上の娘は、幼い頃からクタクタになるまで動いてしまうタイプ。彼女にはできるだけ激しい運動からは距離を置いて欲しいと望んでいたし、本人にも折に触れて言い聞かせていた――。

「陸上部に入りたいって……。あいつ、そんなこと俺には一度も云ったことないな」

妻から麦茶の入ったグラスを受取りながら、私は独りごとのようにこう云った。

「あなたには云わないわ。あの子もたちも、あの子たちなりに色々と考えてるから」

「……」

「走りたいのか？　なあ――」

「理屈でわかっているのと、現実は違うから……。私たちの子だから仕方がないわよ」

よく冷えた麦茶を一気に飲み干すと、足に染みた。

◇

「娘たちを連れて、夕方また来ますね」

昼食が済むとこう云って妻が帰った。今日も晴天。熱気揺らめく窓の外をみていると、暑いさなか妻に行ったり来たりさせるのを申し訳なく思う。

「外は暑そうだな……」

誰に云うでもなく青木さんがつぶやいた。

「こんな天気になったら、この歳になっても高校の夏の合宿を思い出すんだ」

これは私のベッドを飛び越して河西君に向けられた言葉。隠すつもりもないのだが、私も陸上をしていたことを何となく切り出せないでいる。元短距離選手であることをしっかりと確認しあった二人は、時々どちらからともなくこうした話題を投げては陸上談義に華を咲かせている。二人の年齢差は22歳。彼らの接点の100m走は、その単純な競技性ゆえ、お互いのちょっとしたエピソードを話すたびにその世代の背景色や格差といったものが、ぼんやりと浮かび上がって実に興味深かった。私のベッドの上で飛び交う二人のやりとりは、思い出がぎっしり詰まったおもちゃ箱をひっくり返す時のようにスリル満点で、私のソケットの豆球は忙しく点灯した。

「よく、今日のような炎天下で走らされて……。根性は付いたが、気を失いそうになったこともあったな」

青木さんが蒸された窓の外を睨むようにつぶやいた。

「えっ？こんな時間帯に練習してたのですか？ まあ、そういう時代だったんでしょうね」

河西君が呆れた声をあげた。

「ん？ 君たちだって合宿くらいあったら？ 俺のとこのグラウンドは1周が250mでな。先生がこんな日には決まって、今日は500を20本いくぞ。何て無茶を云うんだ」

青木さんが憤るというより、どこか嬉しそうに云った。

「えー。短距離陣がこんなシーズン真ただ中に500を20本ですか。そりゃ、ひどいなあ……。僕らも合宿はありましたけど、昼は密なスピード・トレーニングが出来ないから、早朝と夕方にわけてましたよ」

「えっ！ じゃあ、昼は何をするんだ？」

青木さんが河西君の反応に目を丸くした。

「ウェイト・トレーニングしたり、プールに入ったり。あ、勉強する時間も結構とってもらいましたね」

「プール、勉強……。何か幼稚園みたいだな」

青木さんが豆鉄砲を喰らったような顔をしたが、私はベッドの中で大きくなずいた。私のいた学校でも河西君が云うような意識で練習メニューを組み立ててもらっていたが、当時としては珍しい方で、昔ながらの質より量、根性論、といった取り組みを続けている指導者も多かったようだ。だから当然のこと、青木さんの時代の人にこのような理屈は通りにくいだろう。

「そんな感じなら、散々殴られたんでしょうねえー？」

いかにも、恐いもの見たさといった目をしている河西君。

「普通にな。我々の上の代は戦中の教育を受けているから、身体で教え込むという人が多かったからな。それが当たり前だった。もちろん、昔の教師の拳骨には愛情があったしな」

「どうだか……。もつとも、僕らの頃もそれなりに耳にしましたよ。そういう流れですね」

「そりゃあ、必要なときもあるだろ？」

「僕は……。昔の教師が殴っても許されたのは、愛情持っていたというより、そこに意味とか損得があまり介在していなかったからだと思うんです。しかし、各部活動の取り組み……。特に体

育部の成績が学校名をPRする絶好の販促物となってしまった時点で、教師が拳骨に大義名分というグローブをかぶせてしまった……。そこが問題だと感じるんです」

「生徒はそういうのを見抜くからね」

「……」

こんなやりとりもあった。

「そうだ、試合前には豚カツを食べなかったか？ 試合に勝つ！ だな。ほかにも何だかんだと縁起を担ぎをしたもんだ」

「ん～。試合前に豚カツは駄目ですよ。僕らは一週間くらい前から、練習量と共に食事も徐々に軽めのメニューに落としていって、前日や当日はパスタ系を摂ってましたね」

「ちょ、ちょっと待て。スパゲティなんかで気合が入るのか？」

フォークでパスタをすくい上げる手真似をして、青木さんが首をかしげた。

「田んぼみたいになったグラウンドで試合したことないだろう？ 俺たちのホームグラウンドは水はけが悪くてなあ――」

「アンツーカートラックの競技場なんて、僕らの時代にはひとつもありませんから」

青木さんは我々にとっては懐かしい話も色々としてくれたが、河西君はつれない。

「ゴールラインに張ってあったあの細い糸。一位で入ったらどうってことないのに、遅れてゴールしたら、どこかに引っ掛けてよく火傷したよな。顔にみみず腫れが出来たときは悔しくて、悔しくて……」

「聞いたことがありますよ。我々の時にはもうそんな危険なもの張ってませんでしたけど」

私のベッドの上を飛び交う二人のやりとりは大体こんな流れである。青木さんは熱く信じてきたことを簡単にいなされて悔しいのだろう、時折こちらに背を向けて、やり場のない歯がゆさを滲ませてせている。あ、そういえばその背中が大きく肩の筋肉が盛り上がっていることに気づく。

青木さんの複雑な心境を知ってか知らずか、どんな問いかけにも理路整然と答える河西君。しかし、彼もそのドライな物言いとは裏腹に、青木さんの身体能力に並々ならぬ興味を抱き始めていることが言葉の端々に見え隠れする。

「青木さんが当時、今のようなしっかりとした論理と十分な経験に基づいたトレーニングをして、全天候型のトラックで走っていたら一体どんな記録が出たのでしょうか？」

河西君が嬉しげこう切り出した。私もちようどそのことを考えはじめていたところだ。青木さんは地方大会以降ケガに泣かされたと言ったが、それは話を聞くかぎり酷使による疲労性の故障に違いなく、普通に調整していれば低く見積もってもインターハイ、国体は入賞圏内、ことによると、さらに1ランク、2ランク上を目指せたかもしれない。

「タイムだけで単純に比較してみましようか。えー、」

河西君がそう云って、また得意のスマートフォンに視線を移した。

「青木さんの11秒1と、その年のインターハイ優勝者の10.8との差は0.3秒。僕の10秒75と優勝者の差は0.25秒……。あー、つまり0.3秒。うわー、同じだ。面白いなあ……」

「そんなに面白いか？」

河西君の瞳に何やら熱が帯びてくると、今度は青木さんが一転、ドライなもの云いになった。

「青木さんの時の26回大会優勝者の11秒04と、僕の時の48回大会優勝者の10秒50の差は0.54。青木さんの11秒34と僕の10秒75の差が0.59！ コンマ54とコンマ59ですよ青木さん！」

「あ、ああ。何かわからんが、面白い気がするような、せんような……。俺は昔から数字に弱いんだ」

自分で割り出した4者の対比が近似値になったので、河西君が興奮し青木さんがキョトンとしている。

「20年で0.5秒。トレーニング、食事、競技場、道具、医療……。そんなこんなが追い風になったんだね」

と私が中間地点からつぶやいた。

「追い風参考記録かもしれませんね」

週刊誌を読み始めた青木さんの背中を見ながら河西君がそうつぶやいた。

——20年、0.5秒——

しばらく、河西君と一緒に高校男子100mの変遷にふける。

「こんな話ばかりしていると、なんか……、こう、身体がムズムズしてきますね」

河西君が腕を固定しているのにも関わらず、ベッドの上で器用に腰をひねってストレッチをはじめた。青木さんもいつの間にか週刊誌を読むのをやめて、腕振りのチェックをしている。

「そうだ河西君——。さっき俺のタイムを11秒34って云ったよな。11秒1だったんだよ」

思い出したように青木さんが云った。先ほどのやり取りを腕振りしなげらずと考えていたのだろう。数字に弱いと云ったくせに、自分のタイムはちゃっかり把握している。

「ええ、わかってますよ。手動と電気掲示の誤差分の0.24秒を足して換算したんです。青木さんの手動計測の11秒1は11秒34なんです」

河西君が少しだけ申し訳なさそうに云った。

「え。そんなにきちっと計算出来るのか？ 何となくはわかってたが、そんなふうにはちゃんと考えたことなかったな」

青木さんが不服そうに腕組み。私も0.24という数字はすっかり忘れてしまっていたので新鮮な気分だ。諸説あるように認識していたかもしれない。

「通常は手動と電気の記録を換算までして比べませんからね」

と私が補足すると二人が笑った。

「確かにそうですね。コンマ24秒を足すというのも、ま。数字遊びというか、今となってはあまり意味の無い暫定値ですね」

「0.24かあ。俺は結局手動でしか測ったことがなかったから、もう一つピンとこないな」

「意味がないというものの、やはりある程度の整合性はありますよ。経験上わかります。ただ、現役の時は僕もわざわざこんな数字使わなかったですね。そもそも、コンマ24という数字の由来なんてのも、最近ネットで調べて知ったくらいですから」

河西君はこう云ってスマートフォンに視線を落とし、そのサイトを開いて「0.24」にまつわるエピソードをざっと読み聞かせてくれた——。

「はじめて公式で電気掲示を採用したのは64年の東京五輪。しかし大会前から手動との誤差が指摘されていて、その扱いに苦慮したそうである。大会終了後によく本格的な調査験が実施されて、「0.3秒」の誤差があることが確認されたが、ここで問題になるのは、当面の（手）、（電）、混同のランキング作りと、過去の記録をどう扱うかであった……」

「……、手動のタイムは100分の1秒を全て切り上げますよね。つまり青木さんの11秒1というのは……」

河西君が携帯から顔をあげた。話が複雑になってきたので、この先は実例で説明してくれるようだ。

「青木さんの11秒1というのは、審判の時計が11秒01から11秒10の間で止まっていたということですね」

「ん〜。そういうことだな」

「このタイムに電気との誤差0.3秒を足すわけですから、11秒31から11秒40の間の記録だということです」

「ああー。そうなる、な……」

青木さんと共に私もなんとか相づちを打つ。

「ここで、ま。仕方がないので足して2で割って平均値を出す。えーっと、11秒355。これを四捨五入すれば11秒36になるわけですが、青木さん……、つまり過去のランナーに敬意を表して11秒34とすることにしたらしいのです」

「ほー、知らなかったな」

「一見ドライなその数字に、先輩を重んじる気持ちが折り込まれてるとというのが何ともいいね」

青木さんがうなづいて、私もほのかな感動を口にした。存在すら忘れかけていた旧友と街でばったり会って、その相手から意外な出生を打ち明けられたような気分である。私も陸上経験者の端くれ。時計を正確に止める難しさは知っているのに、手動のタイムを鵜呑みにはしてこなかったが、こんな風にあらためてその曖昧さに触れると何とも味わい深い。

「しかし。何だな、こうあからさまに0.24も減らされたら損した気分ではあるな」

と、青木さんが正直に云った。減る。がいい。私も10秒9を11秒14に換算して損した気分になった。

「それに、数学の授業を聞いているみたいで疲れたな」

青木さんはこうも云ってカッカと笑った。



「スポーツに携わって収入を見込める、ごくごく少数の人たちをのぞいて、圧倒的多数の学生選手は就職とともに引退するんです」

「そりゃそうだな」

「しかし。残念ながら教師や監督、コーチたちはその認識が低い人が多くて、子供たちを安易にスポーツ漬けにしてしまうんですね。時には力づくで……」

河西君が一気にこう云って肩をすくめた。

「僕はその矛盾を父親から教わっていたから、練習や試合ではけして無理をしませんでした。父からは、「駆けっこはほどほどにして、自分の進路をよく考えて自分で決めろ」と、口酸っぱく云われてましてね。それなりに悩んで、服飾関係の仕事に就こうと考えて専門学校に進んだの

です」

昼食後、少しまどろんでいたら青木さんと河西君がこんなやりとりをしていた。河西君になぜ高校で陸上をやめたのかを聞いたらしい。

「しっかりしてるなあ。俺なんかいつも目の前のことばかり追っかけてて、気づいたらこうなっちゃって感じだな」

「僕も大学や実業団から誘ってもらいましたが、その次のことを考えずに進学したり、どんな仕事に就くかも知らずに就職していく先輩たちには違和感を覚えましたよ」

「なんか耳が痛いな」

青木さんがよく刈り込んだ角刈りの後ろの方を、無事なほうの手で撫でた。私も身体のどこかがむず痒くなったので、とりあえず身体の向きを直す。頭の上にぶら下がっている点滴の容器が揺れた。

「それに、推薦してもらったところを辞めちゃって、裏切り者みたいに云われてる人も何人か見ましたから」

苦々しいエピソードを思い起こしたのだろうか、河西君の語気がやや強まったように感じる。私の周りにもスポーツ推薦のそうした弊害に辟易していた者が少なからずいて、ぽつりぽつりと彼らの顔が浮かんでは消えた。

「俺も、会社に入ってからパツとしなかったら、人から色々と言われたもんだ」

と青木さんがしみじみ。

「ケガや不調でそんな扱いなんですから、対人関係なんかの失敗は容赦がないんですよね」

「その通りだ。何だかんだ云っても、俺はなんとか会社に残れたからいいが、同期入社の方がどうしても水が合わずに辞めてしまってな。推薦人の顔に泥を塗ったって、散々こけ下ろされてたな」

「そういうことがあると、次からその学校の生徒は採用しないという風潮があったんですね。今でも変わらないんじゃないですか？」

「そうだろうな」

「気の毒ですよ。自分で吟味して就いた仕事でも、続けるって大変なことですよ。ましてや、よくわからずに就職してるのだから……。彼らはその人の、その後の人生より自分たちの面子やポストの方が大事なんです」

過去に彼の身近でよほど理不尽なことがあったのだろうか？ 河西君は最後、唾でも吐き出すようにこう云った。私のベッドの上で飛び交う、青木さんと河西君とのやりとりの中で、選手がトラックの中で様々な進化を遂げたことを垣間見てきた。しかし、淡々とバトンをつないでいるものもあるようだ。

「ちょっと、手洗いに行ってきます」

河西君がそう云って、きゃしゃな身体をベッドから降ろした。今日もしっかりと左腕を固定してあるが、そういえば動きは非常にしなやかだ。歩く姿も軽やかで軸がしっかりしていることに今気づく。

「あいつと、やっと話が合ったな」

河西君が病室から出て行ってから、青木さんがこう独りごちた。

「俺もあいつのように、少しは勉強しとけば良かったな……」

続けてこんなことも云った。

*

ふと。活字を目で追いたくなり、右足の位置が変わらないように気をつけながらテレビ台の上にある文庫本を手取る。読みかけて家の書棚に長いこと放ってあった本だが、しおりの頁を開くと空白の行がなく、前回どこまで読んだのか見当がつかなかった。あきらめて頁の頭から読み始めると、思いがけず事故を起こす前の自分まで遡った。しばらくは馴染みの坂を駆け下りるような気分。しばらく進むと新しい域に入ったようで、心地良い抵抗のようなものがあってペースがグッと落ちた。なぜか、初めて訪れる競技場のサブグラウンドでウォーミング・アップしている感覚を思い出す。

そんな、入院患者らしい曖昧な時間をつぶしていると病室の外が騒がしくなり、続いてノックがあって看護婦さんが入ってきた。高校生くらいの男の子とその父親を伴っている。男の子が顔に眼帯と絆創膏をしているので、おそらくこの子が入院するのだろう。看護婦さんが病室に入ってすぐ左の、空いているベッドに案内し、名札入れに小慣れた手つきで「山口 徹」と書かれた札を差し入れた。父親が反抗的な態度の息子をたしなめているが、それにはかまわず、看護婦さんが定型の注意事項をカセットテープに録音したラジオ体操のごとく、その口から再生しはじめた。父親はスラックスとポロシャツ姿、よく陽焼けし正義感の強そうなタイプ。息子は黄色の派手なシャツにずらしたGパン。長髪に薄い眉……。ゲームセンターに常駐しているといった身なりの小柄な息子は、どうやら入院するのを拒んでいる様子だ。父親が凄んだりなだめたりしながら何とかベッドに座らせたが、看護婦さんが病室から出て行くと、押し問答をはじめて険悪なムードになっている。

少し心配で様子を見ていると、再びドアがノックされ勢いよく開いた。看護婦さんが戻ってきたのかと思ったのだが、ジャージとTシャツ、スポーツバック、とといったいでたちの女の子だった。入るなり、

「失礼します」

と一礼。先ほどの親子に合流した。ベッドのゲーセンの男の子の姉か妹だろうか、健康的な小麦色に短髪、こちらは見るからに体育会系だ。女の子が二人の間に入ると、ゲーセンはふてくされたようにそっぽを向いて、服のままベッドに潜り込んだ。横になる時にどこかが痛んだらしく顔をしかめている。

「とにかく骨に異常がなくて良かった。この際、ここで全身をよく検査してもらって不安材料をなくすんだ。ここの院長先生は俺の知り合いだから、なるべく早く済むように話しておくから。いいな」

少しおとなしくなった息子にそう云うと父親は、ほかのベッドの面々に軽く挨拶をして病室を出て行った。残された二人に妙な空気が漂う。

「西森、俺帰るわ」

父親が開けたドアが閉まりきらないうちに、彼らの雲行きがまたおかしくなった。しかし、基本的にゲーセンはこの女の子には頭があがらないようで、強引に帰ってしまうということもしない。二人は一応、声をひそめているが、こんな狭い病室では会話の内容も筒抜けである。

「何云ってるの？ ああやって、監督も部員のみんなも心配してるのよ。試合だって目前に迫ってるのに……」

「うるせえ。みんなが心配してんのは俺のことじゃなくて、試合の結果だろ」

無関心を装っているが、週刊誌を読んでいる青木さん、スマートフォンを操作している河西君、それに文庫本をかぎす私。三人ともしっかりと耳が立っている。



「君たち陸上部だろ」

青木さんが病室のみんなに、見舞いのシューアイスを配りながら単刀直入に聞いた。

「はい……、そうですが？」

この子たちが来てまだそれほど時間は経っていないが、二人の会話からだいたいの察しはついている。西森と呼ばれている彼女はマネージャーで、先ほど出て行った男性は父親でなく監督。山口というこの男の子は練習嫌いの天才肌だということ、顔の傷は階段で転んだと本人が言い張っていること……などがすでにわかっている。

「で、この彼は100mを？」

初対面の大人相手に少し緊張気味のマネージャーに、青木さんが自分の希望を云った。

「え？ 山口君をご存知なのですか」

私は青木さんにもらって食べていたシューアイスを、可笑しくて喉に詰めそうになる。左横では河西君が、いまガッツポーズのような仕草をしたように見えた。

「いやー。そんなんじゃないくて、ここにいるのは偶然100mの選手ばかりみたいなんだ。元、だけどね」

と、いかにも嬉しそうな青木さんは、相手には到底理解出来なさそうなことを云って、カッカと笑った。

「この山口君は昨年まで帰宅部だったのですが……」

利発で処理能力に長けていそうなマネージャーが、この病室における大よそ事情を呑み込むと、彼のことを興奮気味に話してくれた。体育会系らしいイントネーションで語尾が強い。

「彼の素質は前々から評判で――、監督とみんなで彼をようやく口説いて、昨年の終わりにあった記録会に出てもらったのです。そしたら今のうちの陸上部で一番速いタイムを出して……」

「そんな話、しなくていいって！ それに俺は今も立派な帰宅部だよ」

何が気に入らないのか、ベッドに横たわって顔の傷を気にしていた山口君が、マネージャーの話をさえぎってしまった。先がよけいに気になる。

「あなただって、やる気を見せてたじゃない。練習だってはじめは欠かさずに来てたのに……」

やれやれといった仕草をして、マネージャーがこう言い返すと、彼はぷいっと黙った。ようするに、自他とも驚くような記録が出て一度は本格的に取り組んでみたのだが、きつくなって投げ出したようだ。

「あーあ。練習しはじめに必ずなる、全身の筋肉痛に耐えられなかったんだな。ま、よくある話だけど半月もしないうちに何ともなくなるのに」

河西君が残念そうに笑いながら云った。私も久しぶりにその痛みを思い出す。中学の記憶だ。入部してたしか3日目か4日目で、頭の前からつま先までの筋肉という筋肉、筋という筋が鉛のように重たくなった。

「普通の才能ではないし、リレーのこともあるので、私たちは何とか続けて欲しいのです。でも、足が痛いとか腰が痛いとか云って……」

「云っとくけど、仮病じゃないからな」

「それはここで調べてもらえば、はっきりするでしょう」

小柄な山口君とそれほど身長差のないマネージャーが、こう云ってキッとにらむと山口君はまたぷいっと視線をそらせた。つぶってはいるが何とも可愛気のある男子である。高3だと云ってるが、どうかすると中学生に見えないこともない。

「それにしても帰宅部に負かされたら、コツコツやって来た者はがっかり来ただろうなあ」

青木さんがいかにも気の毒だというような表情をして云うと、マネージャーがコクリとうなずいて、いろいろあったと云うような顔をした。確かに彼の風貌は体育会系が一番負けたくないタイプだろう。同情はするが、そもそも負ける方もどうかしている。

「で、どのくらいで走ったの？」

青木さんが二人に向かって、記録会で出したという帰宅部のタイムを「どれ、云ってみなさい」といった口調で聞いた。やや間があってマネージャーがため息まじりに答えた。

「10秒83です……」

「10秒83……？」

我々3人はこの数字をハモツた。

「風は？」

河西君がこれまでで一番大きな声をあげた。

「マイナス0.2m」

マネージャーがマネージャー然としてピシヤリと答えた。

「中学の時はなにかスポーツやってたんだろ？」

と青木さんがまるで祈るように聞いた。

「山口君の中学の友人に確認しましたが、中学も帰宅部だったそうです」

マネージャーが調査報告。

「身体を激しく使うアルバイトでも？」

と私。

「やるわけねえだろ」

山口君。

「私たちが彼にそんな質問をたくさんしましたが、速い理由が見当たらないのです。それに彼の生活はむしろ……、不健康とっていいくらいです。補足すれば――、ブロックを使わずに、大きく出遅れての記録です……」

我々はしばらくの間、黙った。



「あまりにもったいなすぎる。君ならちょっと根性を入れて頑張ったら、世界も夢じゃないぞ……」

「とりあえず1年、いや半年だけでも計画的にトレーニングしてみたらどう？ たしかに身体に負荷をかけて、追い込んでいくときは辛いけど、それを今度は調整していった力を解放していくときの高揚感は凄いんだ。しかもその心身の高まりをタイムを通じて確認出来る充実感。君ほどの才能があったなら、僕ら凡人ではけして味わえないものがそこに待っていると思うよ……」

「そんなに大きな大会じゃないけど、私も何度か100の決勝に残ったことがあってね。スタート前にスタンドが静まり返ったあの感触はいまだに忘れられない。ただ、その感動と引き換えに後悔してることも多いから、自分の娘には走ることを奨めていない……。でも、きっと山口君は生活のごく一部としてそういった感動を味わえると思う……」

気づくと我々は、それぞれの言い分で順々に山口君を陸上競技に勧誘していた。つい先ほどまで、走ることのリスクを論じ合っていたのに……。

私は「走る」ということが、ここにきて益々わからなくなってきた。もっともどちらにせよ、彼にはその希有な能力を開花させるという興味が全くない様子だ。

「あんたら3人とも、『何かいろいろあって、苦勞してきました』っていうような難しい顔してるけど、駆けっこやってて本当にそんなに良かったの？」

大方の予想に反し、我々の勧誘に対して山口君は怒鳴るのではなく、静かに3人の痛い所を突いてきた。

「走ってみると云うけど、だから走ってみたよ。でも。もうまっぴらだ。毎日あんな馬鹿みたいに走ってたら、楽しいことが何ひとつ出来ないし、そもそも、もしケガでもしたらどうすんだ。手足のスペアはないんだぜ」

彼は静かに続けた。

「あの監督もどうもうさん臭い。生徒をとにかく強くして、自分の職場での地位を上げようとしてるだけにしか、俺には見えないね」

「ちょっと、監督に対してなんてこと云うのよ」

「走るっていうのは、あんたらが考えてるほど尊くも重要でもないんだって」

山口君はマネージャーの指摘に時折ひるみながらも、走ることへの持論をさらりと云った。彼

は陸上部が、いや、運動部が抱える問題を本能的に察している。

「チクツとしますよ」

例のいささかせっかちそうな看護婦さんが私の腕をめくり、ほくろの横のいつもの場所に点滴の針を入れようとしている――。フォークリフトが足首を踏み台にして跳ね上がった。一直線に深くメスを入れ、ボルトでプレートをねじ込んだ右足は根元から3倍に腫れ上がっている。運がよければ経験せずに済む激痛を、数日のうちに嫌というほど味わった。なのに私はいま、腕に向けられたか細い針におびえ、そのわずかな痛みで顔をしかめている。

多くの患者が運び込まれてくる。ここにさえ来られなかった者もいる。このベッドでまどろんでみると、自分が悲運なのか幸運なのかわからなくなる。よくなっていったのか、そうでないのかもわからなくなる。ともすると。時間や季節がどちらに向かっているのかも怪しくなる。

青木さんは河西君と出会ったことで、その真っ赤な熱源を冷まそうとしている。逆に河西君は封じ込めていたものを解こうとしている……。

「スポーツとは、勝利してパレードするためのものではなく楽しむためのものです……」

いつか。ある恩師がこんな言葉を贈ってくれた。私がおっとはやくにこの言葉の意味を考えていけば、随分違う生き方になっていただろう。

それでも娘は……。実は走った方が幸せなのだろうか？

山口君は……。ゲームセンターにいた方が有意義なのだろうか？

疲れた、少し休もう。病院とはそういう所だ。



「監督は自分のやってきた陸上に関わって、給料もらってんだぜ。そんな奴いる？ 自分がどんなにレアな生き物なのかがわかってねえんだよ」

「なによ、それ。監督は教師として学校から給料をもらってるのよ。部活の顧問はボランティアじゃない」

「西森はなにもわかってねえんだよ――」

車椅子で手洗いから戻ると山口君とマネージャーがまだやり合っていた。青木さんと河西君も自分のベッドでその様子を心配そうに見ている。

「近い将来。かわいい教え子のほぼ全員が、走ることをやめるって本当にわかってたら、あんなにきつい練習を生徒にさせないぜ。現に山崎と東なんて疲れきってて、家と学校の往復で精一杯だろうが」

「頑張ることがそんなにいけないの？ それに山崎君と東君は監督に推薦してもらって大学にいけると思うわ」

「みんな、それにだまされるんだよ――。進路の切符をちらつかされるから、親子して教師の言

いなりになるんだ。俺の連れの兄貴なんか大学までみっちりサッカーやって、一時はJリーグがどうだとか云ってたけど、結局ちょっとした不祥事起こして大学首になったよ」

「そんなの、その人が悪いんじゃない」

「そうとも云い切れないうぜ。あの兄貴、本当に世間知らずだったからな。ものの分別も教えずに身体ばかり鍛えさせた、まわりの大人にも責任はあると俺は思うね」

山口君は鼻をひとつ、ふんと鳴らした。

「可哀そうに急に目標を失って、いまはその鍛えに鍛えた身体を持って余して荒れてるよ。ま。あんな運動バカ、おそらくどんな理由で辞めてたって似たような結末だと思うけど。ともかく、奴らが大袈裟にちらつかす切符は片道切符なのさ」

山口君のそのリアルな話にマネージャーがはじめて気押された。病室の各ベッドの通路に冷たいものが流れる。

「な、西森。そういうことで俺帰るわ」

「ちょっと……」

形勢が有利になったところで、ここだとばかりに山口君がベッドをおりた。どこかが痛むのかもしれないが、さほど身のこなしはよくない。小柄で中肉中背――。本当に特別なところが見当たらない。

「また監督が戻ってくるから、せめてそれまで待つて」

マネージャーが、座っていたパイプ椅子から勢いよく立ち上がり、再び押し問答がはじまる。

「待てよ」

たまりかねたように河西君が声をあげた。

「僕は中学、高校と、君がいま云ったようなことを心配しながら陸上に取り組んだよ。だから常に卒業後のことは考えてたし、実際に希望していた職業に就いている。その上で100mの醍醐味に触れることが出来たんだから、本当によかったと思ってるよ。もちろん、力を持って余した時期はあるけ……」

「は？ それって自慢？ あんたみたいに世間を上手に泳げる奴ばかりじゃねえんだよ」

山口君は河西君の意見を強い口調でさえぎって反論した。

「それに走ってなかったら、違った分野でもっと充実してたんじゃないの？」

彼はさらにこう云って精一杯大人を喰ったような顔をすると、二人はそのままにらみ合った。

「君は、ただ何もしたくない怠け者のようにも見えるけどね」

「なんだと！」

「それとも、何かに挑戦する勇気がないだけか？」

「……こ、この野郎……」

山口君の顔からわずかに血の気が引いて口元がゆがんだ。マネージャーがあわてて二人の間に入り、青木さんもベッドをおりて三人の中に加わった。

「まあ、まあ」

青木さんは何とか場を和ませようと、にらみ合っている二人の怒気を手で交互に制している。

「二人ともそんなに熱くなるな。な、な」

「すいません。つい」

河西君が高校生相手にむきになったのを恥じて苦笑い。山口君が「ふん」と、また鼻を鳴らしてそっぽを向いた。シューっと空気がやわらかくなる。

「ん？ 落としたよ」

青木さんがマネージャーの足元にあるものを、包帯のない方の手で拾ってあげた。

「これは……、なんか懐かしいな。俺たちの頃のとそんなにかわらないな」

青木さんが手にしているのはストップ・ウォッチとホイッスル。マネージャーが椅子から立ち上がる時にでも落としたのだろう。青木さんはそれを手にするなり反射的に**Start/Stop** ボタンを2度押すと、**Reset** ボタン1回押してゼロに戻した。そうせずにはおれないことがよくわかる。ふと、早押しして誰が短いタイムで止められるかを、仲間と競い合ったことを思い出した。あのころは、そんなくだらないことでも意地になってやったものだ。ちょっとした間があってから、青木さんはマネージャーにホイッスルを返ししながら、真面目な顔でこう云った。

「ちょっと、吹いてみてくれないか」

*

ホイッスルの音は我々を競技場へと誘った。

◇

「5回目の結果。1位、山口君64回。2位、河西さん55回。3位、青木さん45回。です」

首からストップ・ウォッチとホイッスルをぶら下げたマネージャーが、バインダーに書き込んだ記録を慣れた口調で読み上げた。3人は私の反対側の空いているベッドに並んで座り、その結果を聞いている。みな同じように膝に手をつき、苦しそうに肩で息をされていて、時折、河西君と山口君が睨み合う。青木さんが「ちくしょう……」と、ひとつ唸った。

「もう、このくらいにしましょう。3時になったら看護婦さんが来ますから」

マネージャーが腕時計をちらりと見てから呆れるように云った。そして彼らがいるベッドと私のベッドとの間の床にしゃがみ込んで、そこに貼ってあるテープをはずしにかかった。

「だ、だめだ」

息を切らしながらそのマネージャーを制したのは、この勝負を当初散々馬鹿にしていた山口君だ。

「俺だけ1回少ないのは不公平だろ、時間もまだあるし」

山口君は立ち上がってマネージャーのところに行くと、はずしかけたテープを元に戻させた。そして、そのテープをまたいで立つと、腰に手をあてがって懸命に息を整えている。男のくせにピアス、だらしのない腰パン……。そばで見ても本当に特別なものは感じない。

やがて山口君は右斜め下の床と、左斜め下の床を交互に見やっ、何やらぶつぶつ云いはじめた。ベッドにいる私の位置からは見えないが、彼が今またいでいるテープの両側には、平行に1本ずつテープが貼られていて、その間隔は1m――。河西君の採寸用メジャーできっちり測っ

である。

山口君がまた大きな深呼吸をした。彼はどうしても河西君が3回目に叩き出した、65回を越さない気が済まない様子だ。

それにしても、妙なことになった……。

*

「ピッ、ピーー」

事の発端は青木さんに頼まれて、マネージャーが遠慮気味に吹いたホイッスルの音だった。

「あれっ。こんなの聞いたら、心臓がバクバクしてきたよ」

河西君が顔を少し赤らめてこう云った。私も同じ。遠い昔に飛んでしまった記憶回路のヒューズにその笛が見事にはまり込んでスパークし、ジューシーに沸騰したものが丹田を突き上げた。

「もう、無性に身体を動かしたくなってきた！ そうだ、山口君。僕とここで反復横とびの勝負をしないか？ 昔からけっこう得意でね、まだまだ若い者にも負けないよ……」

なんの脈略もなしに、河西君は全くもっておかしな提案をした。

「よし、やろう！」

なんと、そう即断したのは青木さん。マネージャーなら必携のテーピングを借りて、そそくさと準備にとりかかり、あれよあれよと云う間に河西君がスタート位置についた。

「ようい——。ピッ」

バインダーを脇に挟んだマネージャーが手馴れた調子でスタートの合図を出し、同時にストップ・ウォッチを押した。河西君は骨折した左腕を固定しているが、それでも素晴らしい身のこなし。実に安定した動きを披露して、見ている我々を唸らせた。

引退して15年。ほとんど運動らしい運動をしていないらしいが、そこは昔とった杵柄。動きがシャープで、最後まで身体をしっかりと理性でコントロールしていた。

1回目。57回——。

この動きを見せ付けられて青木さんの目が据わった。顔を真っ赤にし、その頬をピシャピシャ叩いてから深く息を吸い込んだ。アドレナリンが病室に充満する。その空気を察してか、マネージャーがノギスで測ったようにコール。

「位置について」

青木さんはマネージャーのその凜とした声を聞くと体勢を低くし、ブルーゾーンでじっとバトンを待つ、リレー走者のような独特のフォームをつくった。息を呑む。私はパッと高3の地方予選——。インターハイ出場がかかったヨンケイ決勝の場面を思い出して、全身に鳥肌が走った。

「ようい……」

「ピッ！」

スタートした。荒っぼいが思ったより速い。鬼の形相で回数を重ねるが、気持ちが先行してしまって時折バランスを崩している。力みすぎだ。しかし……、なんだろう、好感が持てる。こうしていると病室の20秒は長く、いつしか私は拳を握りしめていた。やがてマネージャーがカウントダウンをはじめた。

「残り10、9、8、……」

「うお—————」

あと数秒のところで青木さんは雄たけびを上げた。

「青木さん。只今の記録……。58回」

私と河西君は顔を見合わせ。自分のベッドで無関心を気取っていた山口君が身を起こした。

青木さんは来月で52歳。引退して30年あまり。指のケガが軽症である点と、現場での仕事がフットワークを使う点……。この2点が22才の年齢差をひっくり返したのだろうか。勝利への執念も見逃せない。とにかく圧巻だった。



「二回目の記録。河西さん、58回。青木さん、55回——。です」

「お、俺にもやらせろよ……」

2回目の結果を、マネージャーが何かのガイダンスのように発表すると、山口君がついに声をあげた。やる気だ。



「——。山口君の一回目の記録……。57回」

その結果を聞いて青木さんと河西君がニヤリと勝負師のような笑みを浮かべた。目は笑っていない。その二人の表情を見たのだろうか、山口君の口元から「チッ」と音がした。



私は5回目に挑もうとしている青年から視線を落として、自分のメモをみた。

河西 君 (30歳)	57、58、65、60、55
青木さん (52歳)	58、55、54、48、43
山口 君 (18歳)	——、58、62、63、64、

その時代の価値観、生き様、ポリシー、訓練、素質、現状……。様々なものがこの数字を通して浮かび上がってくる気がした。

そして、足がうずいた。

「山口！ 一体なにやってるんだ？」

山口君が5回目のスタートをまさに切ろうとしたとき、彼らの監督が病室に入ってきて頭ごなしに一喝した。監督の後ろには見かけない医師が一人。山口君が顔をしかめ、マネージャーがうろたえている。

「えー、これはですねー」

青木さんが年長者らしく、彼らの前に体を入れて苦しい説明に入った。ややこしいことになった。進んで矢面に立った青木さんもいきなり言葉に詰まり、何とも重い空気が流れる。もう手の施しようがない。

どのくらいそうしていただろうか？ 監督の後ろで様子を見ていた医師がおもむろに口を開いた。

「青木？」



「私に続け！」が口癖だという監督も元100mの選手だった。ベストは大学での10秒88。(マイナス1.2m)44歳。

そして、監督の後ろにいた医師もまた元100mの選手。ベストは11秒0。(強い向い風)52歳。

そう、この医師は我々が入院しているこの高橋病院の院長で、青木さんと地方予選を一緒に走った人物。大会後は親の意向に沿って陸上をやめ、医学部受験に専念したそうで、その時の記録が自己ベストとなった。スラリと長身で、いかにも文武両道のインテリといった風貌だ。センスのいい金縁のメガネをつけている。



高級そうな金縁のメガネが飛んだ……。

院長も監督も根性をむき出して5回試技したが、ともに56回が最高で、青木さんの58回には届かなかった。二人並んで膝に手をつけて、肩で大きな息をしている。どちらがどちらの音を発したのか判らなかったが、「ちくしょう」「チツ」というのが聞こえてきた。



「いい歳して、なに熱くなってんだよ」

まだ息が上がったままの監督に山口君が云った。

「な。ば、馬鹿みたいだな」

息絶え絶えに監督がこういふと山口君がふんと鼻を鳴らす。

「お、お前がなぜ走りたがらないのか……、俺も大よその見当は……、ついている。お前に云われなくても、部活動にはいろんな問題がある……、というのもわかっているしな」

「……」

「だがな山口……。陸上やって良かった、と云って……、訪ねて来てくれる生徒も、実際にたくさんいるんだ」

「OB会に来てない奴らの話は聞いたことあんのかよ」

「いや。それは……。ただ、迷ってばかりでは何もできないからな。誰だって今置かせてもらっている持ち場で、不細工なりにでも頑張るしかないんだ……違うか？」

山口君はまたふんと鼻を鳴らして監督に疑わしげな目を向けたが、それ以上は反論しなかった。一方、青木さんは荒々しい息の院長とにらみ合い、時間軸と言葉を超えた会話を楽しんでいたが――。

「みんな――。バカみたい……」

マネジャーがこうぼつりつつぶやいた端からそれぞれの気持ちの配色が一変し、その言葉の何が可笑しかったのかはわからないが、青木さんと院長がカッカッと笑った。私もつられてクスツとなり、河西君が鼻の下を拳で押さえて噴出し、山口君までもがニヤツとした。そしてやや間があってから、複数の和太鼓を一斉に打ち下ろしたように、病室がドッと湧き、後々振り返るに

、
――何故あんなに笑ったのか？ どのくらいの時間笑っていたのか？ どのように治まったのか？ どんな風にお開きにしたのか？――

どれも、なにも判然としないほど、我々は腹を抱えて笑いに笑い、涙を流しながら腸を煮えくりかえした……。

その後。私は一週間くらいで退院し、2ヶ月近く自宅療養してから再び市場に戻った。そして、半年経ってプレートを抜く手術を受けたのだが、医者が取り出した物をどうするかと聞くので記念にと持って帰ってきた。それを何となく革ひもに結んで身につけた。このプレートは、私が40何年ぶりにハイハイをし、やがて掴まり立ちをし、そしてヨチヨチ歩きをしたことを知っている。その時々は大変な思いをしたが、過ぎてしまえば遠い昔のこのようだ――

あれから四年が経った。

プレートをTシャツの中に戻すと、金属のひんやりとした感触が汗ばんだ胸に広がった。すっかり明るくなった市場の卸売場棟の上空を、食いつぱぐれがなさそうな鳶が悠々と舞っているのが視界に入った。特にかわった風景ではないが、何となく目を細めてその様子を見上げていたら、私は何かをぽっかりと忘れていた気がした。仕事やなんかの実務的なこととは別次元の、もっと毛色の違う何かをだ。それは、忘れていたというより、これから拵えていかなければならない種のものかも知れない。

ふと。ちょっとした遊び心がひねり出て、私は頭の中で長い長い尻糸を鳶の腹に結んでグイッと引っぱってみた。すると、鳶は両翼をピンと張ったまま上へ下へと高度を変え、次に右へ左へと大きく大きく旋廻した。私は愉快的な心持になったが、どこからか二羽のカラスが現れると、分が悪いのか鳶は痛々しく鳴きながら視界から消えていった――。

「酒井さん」

「ん？」

そう云えばこの新入りはあの山口君に少し似たところがある。「ズボンずらすなよ」と時々注意するが駄目だ。

「この人達って、皆言葉遣いが乱暴ですね。まくし立てて云われるから聞き取れなくて……、日に日に萎縮してしまうなあ」

「なあに、すぐに慣れるさ。とにかく焦らないこと……。みんな口は悪いけど腹はないし、あれで意外と気持ちのいい連中ばかりだよ」

仲間の弁護側に立っていると私の携帯が鳴った。上司からだ。指示を聞いて携帯をポケットに仕舞う。

「追加だ。冷蔵庫から奈良の胡瓜3入り10パック。それと、鹿児島の子トマトのS、3ケース……。よし、行くか」

私はフォークリフトに飛び乗ってエンジンをかけた。彼もあわてて私の右側に乗り込む。

「とにかく、焦るなよ。絶対に――」

リフトの爪を上げアクセルを踏み込みながら私は彼に念押しした。

ターレ、トラック、バン、軽トラ……、そしてフォークリフト。卸売場棟がまるでそれ自体が巨大な動力であるかのように、あらゆる種類の車両をけたたましく吞吐している。誰も彼もパレットに荷を積む速度があがっている。バインダーを持った男が何かを指差して怒鳴っている。荷台から落としたケースを拾い集めている者。出たら目にバックしてくるトラックに、クラクションを殴るように鳴らして苛立ちをあらわにする男。目を吊り上げて不機嫌そうに何かを投げつけるキャップをかぶった男――。

あちらこちらで罵声が飛び交い、オイルとひしゃげた段ボールの匂いがたちこめる場内は、まるで喧嘩祭りのクライマックスのような高揚感だ。私はその中をぬうようにフォークリフトを走らせて、あの場所までくると、あの日と同じようなライン取りで左折し、人と品が入り乱れている集荷場にフォークリフトを止めた。

「おい、時間がない。走るぞ！」

私は再び走りはじめた。以前とは少し違う手法で――。

完